

(英語)

英語を使って、主体的にコミュニケーションを図ろうとする子どもの育成

—相手や目的に応じて伝え合うことを通して—

大阪市立鶴見南小学校 研究部

1. 研究主題設定の理由

令和3年度から、学級担任主導の指導形態の下、C-NET と連携しながら、英語に慣れ親しみ、主体的にコミュニケーションを図ろうとする子供を育成する授業づくりについて研究を進めた。間違いを恐れずに安心して発言できる雰囲気の日ごろから育てておくことが大切であることを再確認し、その上で児童が主体的にコミュニケーションを図ろうとする場や手立てを工夫したり、授業でクラスルームイングリッシュを積極的に使ったりすることで、児童は英語に慣れ親しみ、相手意識や目的意識をもって主体的にコミュニケーションを図ることができるようになった。

また、評価についても、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点でどのように評価するか、児童が学びへの意欲を高めることができる評価をどのように行うかについて、研修を重ねながら研究を深めた。

本年度は、二年間の研究の成果と課題をふまえ、研究主題を『「英語を使って、主体的にコミュニケーションを図ろうとする子どもの育成」～相手や目的に応じて伝え合うことを通して～』とし、「児童が学びへの意欲を高めることができる評価の創造」に焦点を当て、さらに研究を進めた。

2. 研究の趣旨

学校現場では、C-NET との TT による指導も取り入れているが、外国語指導に関するスキルや経験が少ない教員が悩みながら指導していることも多い。コミュニケーションが必要な場面では、児童の実態をよく理解している学級担任が指導することが効果的であったり、クラスルームイングリッシュを使う指導者の姿勢が児童にとって良い手本になったりと、学級担任が指導する意義は大きい。指導者の英語力に関係なく、英語に慣れ親しみ、主体的にコミュニケーションを図ろうとする子どもを育成する授業づくりに向けて研究を進めていく必要がある。そのために、「会話」ではなく「対話」することを目指した。「対話」では意味の共有が必要不可欠であり、相手意識、目的意識をもたせることが主体的に学習に取り組む態度につながる。

また、評価についても、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点でどのように評価するか、児童が学びへの意欲を高めることができる評価をどのように行うかについて研究をしていく必要があると考えた。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点① 児童が主体的にコミュニケーションを図ろうとする場や手立ての工夫

○児童が自分の思いや考えを伝え合う活動の設定

○児童が自分の思いや考えを伝え合う必然性のある場面の設定

視点② クラスルームイングリッシュを使った短時間学習、外国語科・外国語活動の授業の創造

○指導者がクラスルームイングリッシュを多く使った授業

視点③ 児童が学びへの意欲を高めることができる評価の創造

○児童が自分の言葉で授業を振り返る活動の設定

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- 安心して発言できる学級の雰囲気の中で、学級担任主導で C-NET と連携しながら、児童が主体的にコミュニケーションを図ろうとする場や手立てを工夫することができた。(教材・教具の工夫、ICT の活用、他校とのオンライン授業など)
- 児童が興味関心をもつ魅力的な Our Goal (言語活動) を設定し、単元の早い段階で児童に伝えることで、学習への目的意識や学習意欲が高めることができた。
- その活動で必要なコミュニケーションポイントを確認したり、指導者のデモンストレーションを見たりして、よりよいコミュニケーションの仕方について考えてから活動に臨むことができた。
- 丁寧な板書や教室掲示、指導者の個別の支援がコミュニケーションや内容理解の手掛かりとなり、積極的に外国語の学習に取り組む態度を身に付けることができた。
- 振り返りシートを工夫したことで、自分や友だちの良さを共有し、自己肯定感をもち、自信をもってコミュニケーションをとろうとする姿が見られるようになった。
- 低学年(英語短時間学習)、中学年(外国語活動)、高学年(外国語科)での系統的な指導により、英語に対する主体的に学ぶ力の育成ができた。
- 指導者が日頃からクラスルームイングリッシュを使うことで、児童は英語に慣れ親しみ、指示や意味を理解したり推測したりできるようになった。
- 指導者が日頃からクラスルームイングリッシュを使うことで、児童は積極的に英語を使用したり、主体的に英語を聞こうとしたりするようになった。
- その場でできる評価としてクラスルームイングリッシュを使った誉め言葉を多く使うことで、児童の学習への意欲を高めることができた。
- 中間評価の方法を工夫したことで、指導者が一時間の中での児童の変容を見取ったり、児童が自分の発表ややり取りを振り返り次の活動に活かしたりすることができた。
- 単元の目標と一単位時間の評価規準を明確にして振り返りシートを作成することで、児童の姿を焦点化して見取ることができた。
- 毎時間の学習内容に合わせた振り返りシートを作成したことで、児童自身が自分の学習を振り返り、変容や課題を確かめ、次の学習に向かうことができた。
- 振り返りシートを点検・分析することで、一人一人の学習状況を把握し、児童の良さや課題を把握できるようになり、授業改善に生かすことができた。
- 授業後に一対一でやり取りをすることで、一人ひとりのつまづきを知ることができ、その場で指導することができた。

(2) 今後の課題

- 児童が学びへの意欲を高めることができる評価のあり方についてはさまざまな成果が見られたが、今後も引き続き研究していく必要がある。